

田植えイベント開催

「農と水の森」が始動 (世田谷キャンパス)

「農ある風景のキャンパスづくりプロジェクト」の一環として整備された空間が「農と水の森」と名付けられ、水田のオープニングイベントが行われた。



稲花小学校の児童も田植えに参加



賑やかな集合写真でセレモニーの幕を閉じた

6月13日、世田谷キャンパスで水田のオープニングセレモニーが開催された。「農ある風景のキャンパスづくり」は学長ビジョンの一つであり、人間の生命の

源である「農」、生命を育む「水」、そして豊かな生態系を象徴する「森」を結び付け「農と水の森」と命名された。当日は、歌手の小林幸子さん(農林水産省お米大使)が応援団長として参加し、「農業が持つ力と地域を結ぶ大切さを実感した。若い世代が農業の価値を信ずる姿に希望を感じ、今後も人とのつながりを育んでいきたい。」と述べた。また、タレントの川瀬良子さん、全国農業協同組合連合会理事長、日本農業新聞

取締役社長、日比谷メニス代表取締役、株式会社グッド代表取締役社長、法人理事など多くの来賓にご臨席いただいた。全学応援団の演舞披露の後に、学長、稲花小学校児童、本学学生など約100名が田植えを行った。

江口学長は「農と水の森」を通じて、地球規模の課題に挑む人材を育成し、持続可能な未来への扉を開く先頭に立ち続けるという強い想いを抱いた。

この水田は学生が主体となって稲作に取り組み、今秋の初収穫に向けて豊かな実りが期待される。【山村月子】



取締役社長、日比谷メニス代表取締役、株式会社グッド代表取締役社長、法人理事など多くの来賓にご臨席いただいた。全学応援団の演舞披露の後に、学長、稲花小学校児童、本学学生など約100名が田植えを行った。

江口学長は「農と水の森」を通じて、地球規模の課題に挑む人材を育成し、持続可能な未来への扉を開く先頭に立ち続けるという強い想いを抱いた。

この水田は学生が主体となって稲作に取り組み、今秋の初収穫に向けて豊かな実りが期待される。【山村月子】

衣料品等のリユースおよびリサイクルの推進に関する協定を締結

農学部は、厚木市、ブックオフコーポレーション株式会社、株式会社BLOOMと「衣料品等のリユース及びリサイクルの推進に関する協定」を令和8年3月に締結した。本協定は、本学以外の厚木市内4大学でも同様の協定が結ばれており、不用品回収を通じたリユース及びリサイクル促進の産学官連携として、日本初の取り組みである。今後は厚木キャンパス内に回収ボックスが設置され、学生は不要となった衣料品や雑貨を手軽にリユースに出す



関係者による協定式の記念写真

【羽曾部聡】
ことができる予定である。回収品は海外での再利用や国内外での再資源化が進められる。本協定により、資源の有効活用と廃棄物削減、地域社会や学生への環境意識の向上、持続可能な社会の実現が期待される。

名鉄観光サービスと包括連携協定を締結

東京農業大学は4月17日、名鉄観光サービス株式会社と包括連携協定を締結した。締結式では江口文陽学長や岩切道郎代表取締役社長らが出席し、協定書に署名。岩切社長は「教育機会をしっかりと生み出し、社会課題の解決に役立つような生徒・学生を生み出せるよう深化していきたい」と述べ、江口学長は「各地域の特性、観光資源、人材といった無限の可能性を持つ資源をうまく社会に活用していくために、名鉄観光サービスと東京農業大学が



江口学長と岩切代表取締役

手を組むことで大きな化学変化を起こせるのではないかと期待を述べた。

今回の協定締結により、移動・交流をデザインする観光産業と実学を重んじる農学の知見が融合した地方創生とキャリア形成の新たなモデル構築を目指していく。

「食と農」の博物館 企画展「猫のすゝめ」開催中



羊毛アートの「ボニャール」も人気

「猫×農学研究」をテーマに猫にまつわる様々な側面を紹介。猫と人類のつながりは農業から始まった。今から約1万年前、人類は食料を安定的に手に入れるために農業を始めた。そしてこの時、収穫した穀物をネズミから守る猫と人類との付き合いが始まったとされている。

猫は歴史上、非常に長く人と関わってきた動物である一方、極めて謎の多い生きものでもある。

地球上的様々な環境に野生のネコ科動物は生息している。さらに、野生で生まれたものにもかかわらず、甘えられそうな人間を見極め、食べ物をねだって最終的には飼いネコに：高い適応能力を有する動物である証拠だ。

本企画展では、フェイクファアの猫人形に加え、最新の猫研究をパネル展示している。猫を飼ったことがある人も、ない人も、猫の魅力に出会えるだろう。

SDGs コンテスト

「東京農業大学 SDGsコンテスト」を今年も開催！
SDGs17の目標と本学が掲げる「学びのキーワード」から、地域社会をより良くするために、君に今できること・今から出来ることについて、小論文を募集する。

応募期間 2026年 7/1(水)～9/4(金)必着
応募対象 高校生

詳細はこちらから

The NEWS

東京農大

2026年(令和8年)7月号
第107号

東京農業大学
TOKYO UNIVERSITY OF AGRICULTURE 1891

「総合農学」を推進する

- 世田谷キャンパス 大学本部
- 大学院・応用生物科学部
- 生命科学部・地域環境科学部
- 国際食料情報学部
- 厚木キャンパス
- 大学院・農学部
- 北海道オホーツクキャンパス
- 大学院・生物産業学部

4月・7月・12月発行
編集 東京農業大学 学長室企画広報課
〒156-8502 東京都世田谷区桜丘 1-1-1
https://www.nodai.ac.jp



HEADLINE

- 研究最前線・農芸化学科/外国人留学生懇談会開催/江口学長「カンボジア王国友好勲章」受賞/きのこ図鑑……2
- 「香りの街網走プロジェクト」の挑戦/学長の愛したフィールドの旅(世田谷キャンパス篇)/受験生向けイベント情報……3
- 農友会の活動「馬術部・全学応援団チアリーダー部・ホッケー部・剣道部」……4

SNS 随時更新中

f LINE y BLO

研究最前線

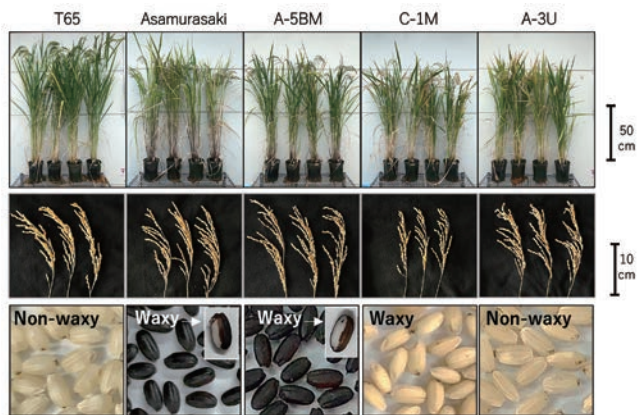
農芸化学科 齋藤 彰宏 助教

遺伝子組換えを使わず、鉄を多く含むコメの開発に成功

鉄欠乏症は世界で20億人以上が影響を受ける最も深刻な栄養障害の一つである。特に主食作物に鉄を多く含ませる「バイオフォーティファイケーション(栄養強化育種)」は、持続的な鉄欠乏症対策として世界的に期待されている。

しかし、イネの米粒に鉄を蓄積させることは容易ではない。鉄は植物にとって必須元素である一方、過剰になると有害であるため、植物には鉄吸収を厳密に制御する仕組みが備わっている。また、土壌に鉄を施用しても多くは不溶化してしまい、効率よく利用されない。さらに、鉄は植物体内でも移動しにくく、種子形成期に米粒へ送り込むことは難しい。そのため、高铁米の開発は長年の課題であった。

これまでに報告された



開発した高铁イネ系統。黒米系統、白米系統、糯系統など多様な品種背景で高铁化に成功した。左から親品種(台65号:T65)、朝紫、黒米型の高铁米(A-5BM)、白米糯型の高铁米(C-1M)、白米粳型の高铁米(A-3U)。

～遺伝子組換えを使用しない社会実装型の高铁米のゲノム育種～

高铁米の多くは、鉄の吸収や輸送に関わる遺伝子を改変した遺伝子組換え技術によるものである。しかし、遺伝子組換え作物は社会的受容や流通の面で課題も残されている。

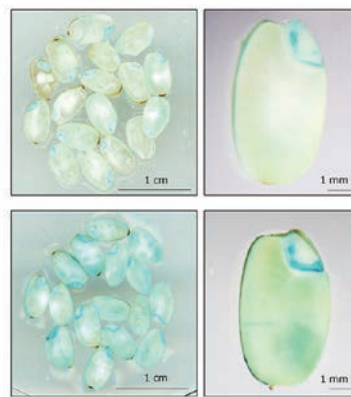
こうした中、我々は遺伝子組換えを用いない高铁米の開発に成功した。研究の発端は、著者が発見したイネ突然変異体「*tetsu*」である。この系統と野生型との交配後代で次世代シーケンサーを用いた遺伝型解析と全ゲノム解析の結果、*HRZ1*という鉄栄養状態を感じ取るタンパク質をコードする遺伝子に新規変異が見つかった。通常のイネでは鉄が十分に蓄積すると吸収を抑制するが、*tetsu*ではこの制御が弱まり、より多くの鉄を蓄積できることが分かった。

さらに、この変異を日本の優良水稻品種へ交配により導入したところ、通常の国内圃場では収量を維持したまま玄米および精米中の鉄含量を2倍以上に高めることができた。現在は、品種登録を目指すとともに、収量性や食味を向上させるための連続戻し交配、さらにはこの有用変異を国内外の多様なイネ品種へ導入する研究も並行して進めている。本成果は、植物栄養学と分子遺伝学を融合した農大発の研究成果であり、世界の鉄欠乏症改善に貢献する高铁米の実用化を目指している。

本研究は、本学の「こめプロジェクト」をはじめとする複数のプロジェクト研究の支援を受けて進めたものであり、関係各位に感謝し上げる。

【齋藤彰宏(農芸化学科助教)】

種子内の鉄の染色像



鉄染色(青色)による種子内鉄分布の比較。高铁イネ系統では種子内の鉄蓄積が増加している。

外国人留学生懇談会

「International Students Welcome Party」を開催

5月11日、本学世田谷キャンパスにおいて、外国人留学生懇談会「International Students Welcome Party」を開催した。毎年恒例の外国人留学生懇談会は、留

学生が留学生同士、日本人学生、教職員と交流を深めるために行われる大きなイベントである。今年は、駐日タンザニア連合共和国大使館アンダーソン・グクウィ・ムテンブワ特命全権大使をお招きし、本学の学生約80人が参加した。本学江口



江口学長の開会挨拶



ムテンブワ駐日タンザニア大使のご挨拶

文陽学長の開会挨拶と、ムテンブワ特命全権大使のご挨拶に始まり、新入留学生からの自己紹介や歌のパフォーマンス、日本人学生による日本の文化紹介などが行われ、賑やかに懇親を深めた。

なお、今年は21ヶ国・地域より37名の外国人

留学生が入学し、6ヶ国・地域の協定校より11名の Visiting Students を受け入れている。

また、グローバル連携センターは、多様な国際教育プログラムを実施している。①本学の海外協定校に半年または1年間留学し、専門科目を学習する「長期留学」、②夏期と春期休業期間に海外協定校を訪れ、学生交流を行い、農村や農業関連企業の視察を通じて派遣国の食農環境を学ぶ「短期派遣プログラム」、③海外協定校の代表学生を招待し、食・農・環境に係る諸課題について、国境を越えて議論を行う「ISS」(International Students Summit on Food, Agriculture and Environment/食と農と環境を考える世界学生サミット)、④アジア地域における「食・農・環境」について、講義・フィールドスタディー・ワークショップを英語で実施する国際体験学習プログラム「CIEP」(Comprehensive International Education Program)、⑤日本人学生と留学生が集い、互いの言語や文化、歴史を学び合う「English Cafe」など、幅広いプログラムを展開している。【宮浦理恵(グローバル連携センター長)】

域への支援活動が高く評価され、2026年3月、江口文陽学長が東京農業大学を代表して「カンボジア王国友好勲章(Royal Order of Sahametrei)」を受章した。

この勲章は、カンボジアの国王と国民のために、対外関係や外交的任務の分野で傑出した貢献を果たした外国人に友情の印として与えられるものである。

【三原真智人】

江口文陽学長

「カンボジア王国友好勲章」を受賞

東京農業大学は2006年以降、カンボジア王立農業大学などと連携し、カンボジア農

山村地域における食環境教育や持続可能な農業生産環境の構築、ESD(持続可能な開

発のための教育)の普及に継続的に取り組んできた。これら約20年にわたる農山村地



ハタケシメジ

畑占地・畑湿地
学名: *Lyophyllum decastes*



おいさと
健康を支える
秋の恵み

秋に発生するきのこで、日本各地の草地や林の周辺に自生している。近年は栽培技術の向上により流通量が増え、スーパーや直売所でも見かけるようになった。歯ごたえのある食感と豊かな旨味が特徴で、「香り松茸、味しめじ」を思わせる味わいが魅力である。また、β-グルカンや食物繊維、ビタミンB群などを含むことから健康食材としても注目されている。江口学長らの研究では、健康維持や生活習慣病予防に役立つ可能性が示されており、機能性食品素材として期待されている。【文・寺田守一、写真・江口文陽(学長)】

EVENT

受験生向けイベント開催!

オープンキャンパス



北方圏農学科のプログラムの様子



研究室ツアーも人気の世田谷

5月23・24日は厚木、6月14日は世田谷でオープンキャンパスを開催。

厚木では1,265名と昨年を大幅に上回る来場者を迎え、施設見学ツアーを始めさまざまなプログラムが満員となった。帰り際の収穫体験も活況で参加者は満足そうに帰路についた。

世田谷でも昨年度を大幅に超える4,079名の来場があった。マナビ体感を始め、各学部で実施する研究室ツアーも賑わいを見せ、熱心に教員や学生の話に耳を傾ける高校生の姿が印象的だった。

6月20日に開催された北海道オホーツクキャンパスは肌寒い天候だったが、参加者たちは各学科の教育内容や研究活動、オホーツクならではの学生生活について、熱心に耳を傾けていた。夏休み前の時期にもかかわらず遠方から多くの参加者が訪れ、生物産業学部の教育・研究環境や地域性が、受験生にも強く注目されていることを再認識する機会となった。

富士農場見学ツアー



乳牛部門見学の様子

富士農場では6月28日、受験生と保護者を対象に富士農場見学ツアーを実施した。参加者は雄大な富士山麓の自然環境の中で、肉牛・乳牛・豚・家禽の4部門を見学。研修生、学生や教職員から教育・研究環境の説明を受け、実践的な農学教育への理解を深めた。参加者からは「大学での学びを具体的にイメージできた」と好評で、進路選択の貴重な機会となった。見学後にはお土産としてホロホロ鳥の卵が配られ、参加者は調理法を聞くなど珍しい卵に興味を示していた。

■これからのイベント

イベント詳細はこちら>>>



▶オープンキャンパス 事前申込制

厚木キャンパス 世田谷キャンパス	8/1(土)～8/2(日)
北海道オホーツク キャンパス	7/25(土) 8/22(土) 2027 3/20(土)
オンライン	8/25(火)

▶収穫祭

厚木キャンパス	10/31(土)～11/1(日)
世田谷キャンパス	10/30(金)～11/1(日)
北海道オホーツク キャンパス	10/11(日)～10/12(月・祝)

事前申込制

- ▶農学部特別講義(実習体験) 高校生対象
厚木キャンパス 8/4(火)
- ▶農学部まるわかり説明会 高校1・2年生対象
厚木キャンパス 12/20(日)

香りの力で網走の魅力を発信!

東京農業大学 生物産業学部 食香粧化学科 3年 松田 響花 さん

「香りの街 網走プロジェクト」の挑戦



「香りの街 網走プロジェクト」は、東京農業大学食香粧化学科所属の学生が、地域活性化を目指して立ち上げた取り組みである。私たちは網走で生活する中で数多くの魅力に触れ、「食香粧化学科ならではのアプローチで、より多くの人に網走を知り、楽しみ、訪れてほしい」という強い思いに至った。そして、学部内ビジネスコンテ

網走の豊かな四季から着想「四季の香り」

主な活動は2つある。1つ目は、市内の観光スポットを中心に季節に合わせた香りを設置し、網走を五感で楽しんでもらう取り組みだ。2つ目は、年に一度の大規模な香りイベント「網香届(あこど)祭」である。昨年開催し大好評であった、四季の香りを巡る「香りのス

ストでアイデアとして練り上げ、現在は実行段階である。本プロジェクトは、網走の魅力を「香り」として表現し、網走内外へ発信していくことが目的だ。香りはすべて食香粧化学科の学生が調香しており、現在は網走の豊かな四季から着想を得た「四季の香り」の開発に取り組んでいる。立ち上げ当初は2人だったが、今では10人のメンバーが互いにアイデアを出し合い、和気あいあいと活動している。

網走の四季から着想を得た香りは一体どんな世界を魅せてくれるのか、ぜひ現地に足を運んで確かめてほしい。

【松田 響花】



プロジェクトの仲間たちと



連載

学長の愛したフィールドの旅【世田谷キャンパス篇】

「農ある風景」を創出

東京農業大学世田谷キャンパスは、都市の中心部に位置しながら、高度な総合農学の研究と実践教育を支える多様なフィールド施設を擁し、「キャンパス全体が生きている博物館」として機能している。

キャンパス内には、多様な研究を行う野外実験施設や作物の栽培管理を実践的に学ぶ圃場、学祖榎本武揚が掲げた幅広い学びの物品や伝統的な農法で活用されてきた古農具、本学の学際的な特徴を継承す



畑や果樹、花のフィールドと雑木林のつくる「実りの杜」

た都市型の敷地内で、充実した環境は、学生の主体的な学びや活発な課外活動を支える基盤となっており、研究活動から地域連携、部活動に至るまで、多方面での学生の活躍を後押ししている。しかし、これらの屋内外の学びのフィールド施設を今後も維持・発展させていくためには、いくつかの重要課題が存在する。まず、限られた都市型の敷地内で、

る貴重標本などが整備・展示され、都市にないながら農業の生産現場を体感できる「農ある風景」が創出されつつある。これらの施設は単なる実験・実習の場にとどまらず、奥多摩演習林から調達した持続可能な木材を建築や施設に活用することで、森林学・環境学の知見を学内空間に還元する資源循環のショーケースとしての役割も果たしている。

今後は、これらの課題を解決するため、農学、環境科学、建築学、造園学などを融合させた学際的なアプローチが必要となる。世田谷キャンパスは、歴史的な農の思想を継承しつつ、最先端のスマート農業技術や環境負荷低減システムを融合させることで、次世代の都市型総合農学拠点のモデルケースとして、さらなる進化を目指している。【江口文陽(学長)】

高度化する最新の実験設備と伝統的な農林業の実践スペースをどのように共存させ、最適に配置するかという空間創出が課題だ。さらに、気候変動に伴う極端な気象変化への対応や施設の老朽化に伴う維持管理コストの増大、都市環境における生物多様性の保全と安全性の両立も求めなくてはならない。

農友会活動

全学応援団チアリーダー部

“応援する力”を磨いて

USA School & College Nationals 2026 2位入賞

チームワークで会場を魅了し
好成績を収めた



全学応援団チアリーダー部 FIGHTING RADISH は、2026年3月26日に幕張メッセイベントホールで開催された USA School & College Nationals 2026 に出場し、大学編成 Show Cheer 部門で2位入賞を果たした。

“Nationals”は全国選手権大会を意味しており、地区大会である“Regionals”を勝ち抜いた各地域の代表チームが集う大会である。本大会は国内最大規模のチアリーディング・チアダンス競技会の一つとして知られ、毎年多くの学校が最高峰の舞台を目指して挑んでいる。その中で完成度・難易度ともに高い演技を披露し、好成績を収めた。



全学応援団チアリーダー部は、チアリーディング・吹奏楽部とともに応援活動を主軸とする組織であり、競技大会への出場は応援スキルの向上と表現力の強化を目的として取り組んでいる。中間の努力に寄り添い、その背中を押す存在として、日々の練習で培った技術とチームワークを競技の場でも存分に発揮し、会場を魅了した。

その他

大学広報特別表彰
写真展表彰を実施

2025年度東京農大「大学広報特別表彰」および「写真展表彰」を3月に実施した。本表彰は、アントレプレナーシップ教育の推進および大学広報に著しい貢献を果たした学生や団体の表彰を目的に実施。小田急電鉄株式会社、株式会社小田急SCディベロップメント、株式会社小田急エージェンシーの小田急グループ3社、株式会社日本農業新聞に

も表彰趣旨に賛同いただき、実施に当たった。また会場では、農友会写真部協力の写真展「走るを、写す」に対する表彰も併せて行われた。

詳しくは↓



剣道部

2名が出場権獲得
第74回
全日本学生剣道選手権大会へ

出場権を獲得した
嘉村さん(右)と織田さん(左)

第72回関東学生剣道選手権大会が5月6日、10日に開催され、農友会剣道部の嘉村侑也(生産環境工学科4年)と織田慶次(国際農業開発学科2年)が、出場者451人が競う激戦を勝ち抜き、7月4、5日に日本武道館で開催される第74回全日本学生剣道選手権大会へ

の出場権(72枠)を獲得した。また、東京都学生剣道選手権大会では鈴木健心(森林総合科学科3年)が準優勝、古賀奏望(生産環境工学科3年)と須山寧々(アグリビジネス学科1年)がベスト8(敢闘賞)に入賞した。

【浦崎広空】

馬術部

関東学生馬術選手権大会優勝
馬術部、関東を制し全日本へ

競技中の川上さんと
ロジエスターM(明治大学馬匹)
*競技規定により協会から提供された
馬に騎乗

農友会馬術部は、5月15日から17日にかけて津久井馬術競技場で開催された「第98回関東学生馬術選手権大会」に出場した。本大会では、川上真生(アグリビジネス学科3年)が見事な優勝を果たした。さらに同大会において、古川聖(アグリビジネス学科2年)も10位入賞を遂げ、両名そろって12月に南相馬市馬事公苑で行われる予定の「第98回全日本学生馬術選手権大会」への出場権を獲得した。

また、同時開催された「第70回関東学生馬術女子選手権大会」に



においても、中山樺(造園科学科4年)が11位に入賞するなど、日頃の厳しい練習の成果を遺憾なく発揮して、馬術部全体の躍進が光る大会となった。



全日本学生馬術選手権大会でも、さらなる高みを目指して挑む選手たちの活躍に、引き続き温かい声援を期待したい。

【副部長 犬田剛】

ホッケー部

関東学生春季リーグ 女子準優勝・男子3位



決勝進出が決まり喜び合う選手たち

関東学生ホッケー春季リーグ戦(4月5日～6月14日)で女子が1部準優勝を果たした。準決勝では駿河台大学相手に先制。その後追い付かれ1対1となったものの、シュートアウト戦の末2対1で勝利した。決勝では、王者の山梨学院大学と対戦。強豪相手に果敢に挑み、積極的に攻め込む場面も多くあったが、惜しくも0対1で敗れ準優勝となった。

また、本リーグの敢闘選手には齋藤史果(アグリビジネス学科3年)が選出された。この結果、男女ともに第45回全日本大学ホッケー王座決定戦(6月25日～28日 福井県開催)への出場権を獲得。温かい声援をいただいた皆様に感謝申し上げます。

【女子監督 吉田一男】